



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダークツーリズムがつなぐ「記憶」・「民際の紐帯」・「協育」：京都・ウトロ地区を事例に
Author(s)	大宮, 太陽
Citation	Sauvage：北海道大学国際広報メディア・観光学院院生論集, 22, 25-40
Issue Date	2026-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99265
Type	departmental bulletin paper
File Information	Sauvage22_25.pdf



ダークツーリズムがつなぐ「記憶」・「民際的紐帯」・「協育」

—京都・ウトロ地区を事例に—

大宮 太陽

立命館大学大学院 文学研究科 行動文化情報学専攻 地理学・地域観光学専修
博士前期課程

1 はじめに

1, 1 研究目的

本論文¹の目的は、ダークツーリズムを悲劇の記憶の消費と捉えるのではなく、記憶の共有、民際的紐帯、協育を通じた社会的実践として再定位することにある。

先行研究では、来訪者がその経験をどのように内面化し、自己史や社会的行動へとつなげていくのかという点は、十分に検討されてこなかった。そのため本論文では、ダークツーリズムを「悲しみの記憶を保存・伝達する装置」としてではなく、来訪者と地域住民が記憶を共有し、協育を通じて民際的紐帯を形成する「動的プロセス」として理論化することを目指す。

その際には、鶴見和子、中村尚司の「民際学」的視点、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶論」、井口貢の「協育としての観光」などの理論を参照し、事例も含めながらダークツーリズムの再考を試みる。

1, 2 研究背景と問題意識

2024年現在、観光はコロナ禍を乗り越え、日本への外国人観光客数も急激に回復しつつある（図1）。新型コロナウイルス流行前の2019年には、訪日外国人観光客数は3188万人、出国日本人数は2008万人であった。その翌年に流行する新型コロナウイルスの蔓延によって2020年にはそれぞれ412万人、317万人。2021年には25万人、51万人。2022年には383万人、277万人、と急激に下落した。しかし、2023年には、2507万人、962万人、であった。訪日外国人観光客数は、2019年と並ぶほど回復しつつある。また、2024年には、2019年の観光客数を超える観光客が日本にやってくると予想されている。

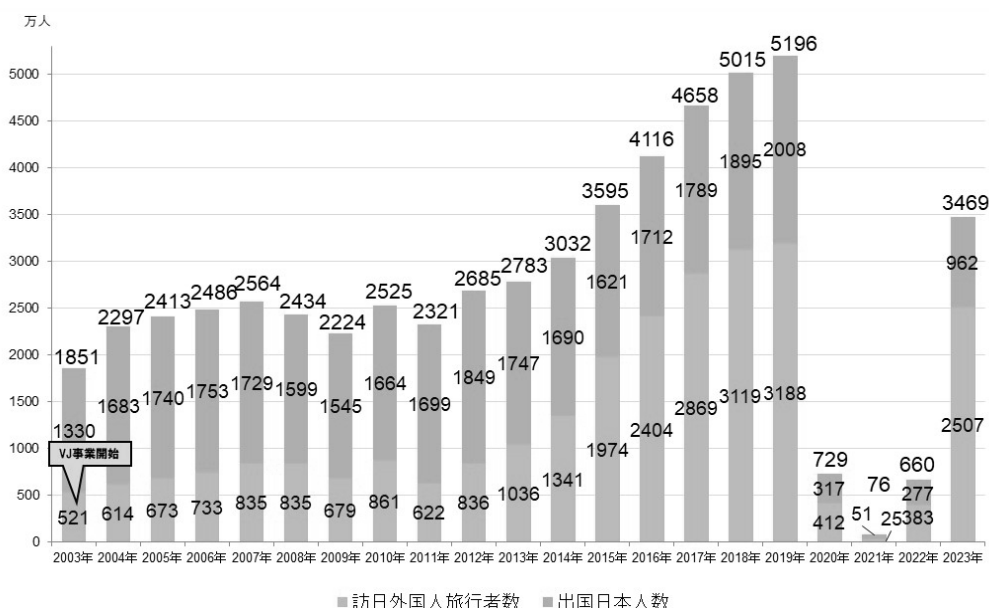


図1 訪日外国人旅行者数・出国日本人数の推移

¹ 本論文は、2024年度に同志社大学政策学部へ提出した卒業論文を加筆・修正したものである。

そうした流れの中でさまざまな問題も顕在化してきた。例えば、オーバーツーリズム²や、観光による文化の商品化³の問題である。これらの問題は、現代社会において、観光という現象が、ただの暇つぶしや、消費行為として扱われつつあることを意味している。その反省にたつて、「持続可能な観光」や「オルタナティブ・ツーリズム」という新たな観光のあり方が提唱されてきた。このような観光(研究)の流れを整理したのが、ジャファリである。ジャファリは、「観光研究の基盤となる、観光に対する研究者の価値判断、つまり研究者の観光『観』に着目」(安村 2011) し、4つのグループに集約した。

- ① 擁護の土台 労働活性化型産業としての観光産業の経済的重要性に焦点を当てた土台で、ナショナリズムが蔓延した 1960 年代に開発途上国で浸透した。開発への乗車切符としてのマス・ツーリズム擁護論。
- ② 警告の土台 1970 年代に、観光振興には文化の商品化その他のマイナスの側面が伴うことを明らかにした。擁護の土台に対する警告の土台。
- ③ 適合の土台 マス・ツーリズムの流れを変えるほどではなかったものの、警告の土台の主張を踏まえて擁護の土台を修正しようとした。オルタナティブ・ツーリズム(新たな観光のあり方)などに代表される系譜。
- ④ 知識ベースの土台 他の3つの土台を基礎としながら、観光研究を科学的基礎の上に位置づけようとするもので、観光の形態や成果を正当化しようというのではなく、観光に関する科学的知識の集積体を編成しようとする(岡本 2001:22)。

このように、高度経済成長期における乱開発、およびマス・ツーリズムの反省の中で、新たな観光のあり方が模索され、過去の事例を止揚し、観光という現象を捉え直そうという動きがあった。こうした流れのなかで、観光を消費行為と位置付けるのではなく、エコツーリズム⁴のような教育効果を志向するような観光形態が現れた。井口貢は、観光の意義と教育の関係性を強調している。井口は、先生が上から教えるような原始的な「教育」ではなく、子どもたちと、大人が共に学びあい、子どもは大人から学び、大人も子どもたちから学ぶこともあるという「協育」を提唱している。

観光とはその本来の意味と意義は、単なる暇つぶしや物見遊山ではなく、ましてやお金儲けのための手段でもなく、子どもや孫たち次世代の担い手たちに何かを伝える「文化」と「教育」でなければならないと私は強く思う。しかもここでいう「教育」とは、高学歴社会に求められるための教育を意味するわけでは、決してない。(中略)「教育」としての観光とは、常民の生活文化の向上のために、知識のみではなく知恵(智慧)と教養を育む役割を果たすべきものであると考えたい。そして老若男女を問うことなく地域で共に学び合うべき「協育」である(井口 2021:13)。

また、岩崎早穂も、観光と教育の関係性を次のように指摘している。

観光と地域学習は親和性が高い。しかし、最初から観光の視点で地域をみようとする姿勢では

² オーバーツーリズムには、研究者によってさまざまな定義がある。一例として JTB 総合研究所は「特定の観光地において、訪問客の著しい増加等が、地域住民の生活や自然環境、景観等に対して受忍限度を超える負の影響をもたらしたり、観光客の満足度を著しく低下させるような状況」(株式会社 JTB 総合研究所 2020) と定義している。オーバーツーリズムの一つの例として、京都・祇園における舞妓パパラッチ(中井 2019:23-8)がある。

³ 観光による商品化は、観光まちづくりの文脈でよく語られる。安村克己は、「観光まちづくりでは、地域の生活、自然、文化などのあらゆる観光対象に値段がつけられ売買され、『まち』全体が観光の商品となる」(安村 2006) としている。また、橋本和也は、商品化の問題点として、「地域の人々のための文化的製品の意味を損なうだけではなく、観光者にとっての意味も損なうという問題を引き起こす」(橋本 2011:68) としている。

⁴ エコツーリズムは、保護地域のための資金をつくり出し、地域社会の雇用を創出し、環境教育を提供することにより、自然環境の保全に貢献するような自然志向型の観光(須永 2014:176) のことである。

順序があべこべになってしまう。まず地域の人々のくらしがあり、次に観光がくるという点こそ学習を通して伝えなければならない。真の観光教育は、観光を振興するための教育ではない。わたしたちが将来、より豊かにくらしにくための学びを、観光の視点からサポートすることにある（岩崎 2024:83）。

本論文では、ニューツーリズムのうちのひとつの「ダークツーリズム」について取り上げ、特に、京都府宇治市のウトロ地区、ウトロ平和祈念館の取り組みや活動を取り上げる。

1, 3 研究方法

以下ではまず、「ダークツーリズムとは何か」について検討し、その後、「ダークツーリズム」によって「訪問者と悲しみの記憶を共有していく」（井出 2018:41）ことを集合的記憶論と絡めて論じる。最後に、ダークツーリズムと教育（協育）の接続を図り、ダークツーリズムのあり方、役割について考察していく。

研究方法として、京都府宇治市のウトロ地区、ウトロ平和祈念館を事例に、ダークツーリズムが来訪者の感情・行動・価値観にどのような変容をもたらすのか、それが 地域社会との関係性の中でいかに育まれるのかをウトロ祈念館来館者用感想ノートの記述を用いて明らかにする。

2 ダークツーリズムとは何か

2, 1 ダークツーリズムの定義と分類

ダークツーリズムは、「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」（Sharpley and Stone 2009:10）、「戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶をめぐる旅」（井出 2018:20）、「死・悲劇・災害にかかわる場所で展開される見物」（Lennon and Foley 2000:198）また、「実際または再創造された死や被災、不気味な物事（macabre）にかかわる場所、アトラクション、展示などの見物」（Stone 2006:146）とされている。

ダークツーリズムは分類することができ、「訪問される場所による分類」と「濃淡による分類」（遠藤 2019:8-11）がある。

前者は、さらに、①人為的にもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー、②自然によってもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー、③人為的なものと自然の複合的な組み合わせによってもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー、に分類できる⁵。

後者は、「目的が教育志向か娯楽志向か」「保存を重視しているか商業性を重視しているか」「真正性を知覚できるか否か」「真正性がローカリティと結びついているか否か」「最近に起きたことか昔に起きたことか」「作作的な意図が含まれているか否か」「観光のインフラストラクチャーとして整備されているか否か」によって「非常にダーク」なツーリズムから「非常にライト」なツーリズムまで様々な段階があることがわかる（図 2）。

⁵ ①の例として、広島、長崎の原爆遺構、アウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所、水俣病資料館などを訪れるツアーがある。

②の例として、阪神淡路大震災の記憶を伝える「人と防災未来センター」、2004 年 12 月 26 日にインドネシアのスマトラ島を襲った津波被害を後世に伝える「アチェ津波博物館」を訪れるツアーがある。

③の例として、東日本大震災が挙げられる。自然災害という「地震」と、福島第一原発のメルトダウン発生による放射性物質漏洩という「人為的な事故」が組み合わさっている（遠藤 2018:159-61）。

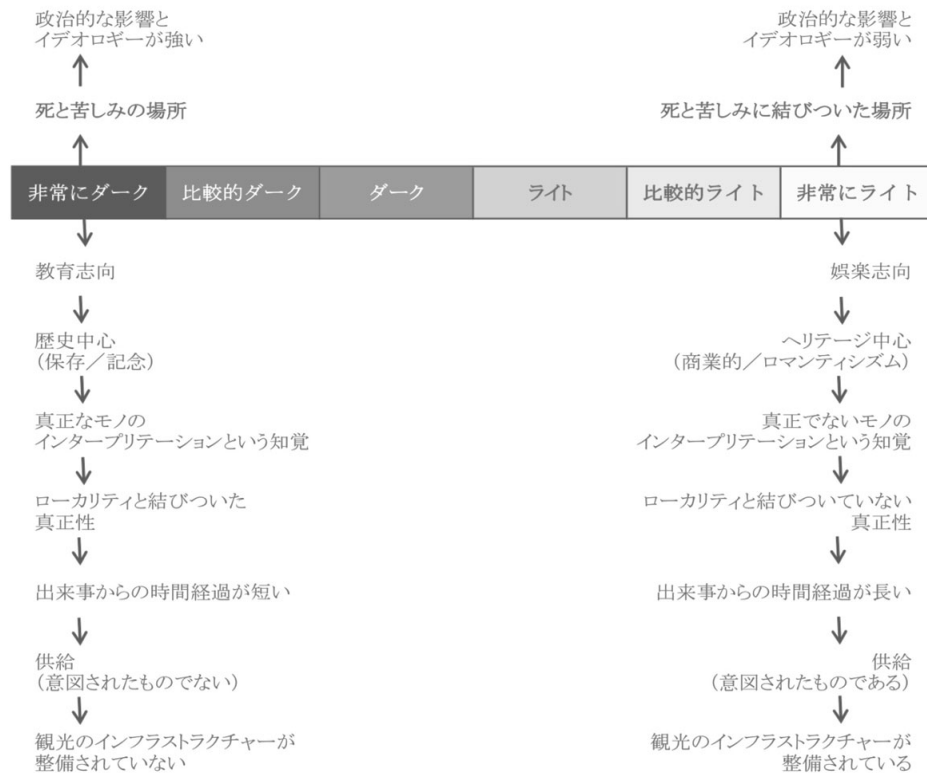


図 2 「ダークツーリズム」のスペクトラム

出典：遠藤（2018:162）

また、Sharpley（2009）は、旅行者のダークツーリズムへの興味の深さとそれを提供する度合いについて 4 つに分類している。

1. Pale tourism（ペールツーリズム）

さほど、死についても興味があるわけではないが、偶然訪れた場所がそのような場所だった。

2. Grey tourism demand（グレイツーリズムの需要）

死について多少の興味を持っており、無意識に訪れた場所がダークツーリズムの場所だった。

3. Grey tourism supply（グレイツーリズムの供給）

死にまつわる場所であるが、死自体がメインの観光資源ではない。

4. Black tourism（ブラックツーリズム）

死に関心のある観光客にそのような体験をさせることにより訪れる観光客を満足させる。

2. 2 ダークツーリズムのはじまり

ダークツーリズムは観光の分野における比較的新しい概念であり、1996 年に、International Journal of Heritage Studies が *JFK and dark tourism: A fascination with assassination* (Foley and Lennon 1996) と題する論文を掲載した。これをきっかけにダークツーリズムが研究の議論の俎上に上がることとなった。

この論文の著者が、マルコム・フォーリー (Malcolm Foley) とジョン・レノン (John Lennon) である。この二人はのちに共著として *Dark Tourism* (Lennon and Foley 2000) を上梓することになる。同書は、「アウシュビッツやチェルノブイリなどが世界的な観光地として注目される理由を説明する理論的枠組みとして注目され、多くの研究者を魅了した」(古賀 2022:255)。そして、レノンとフォーリーが「ダークツーリズムの提唱者」と呼ばれていくこととなった。

また、2001年には、セントラルランカシャー大学のフィリップ・ストーン（Philip R. Stone）とリチャード・シャープリー（Richard Sharpley）が *The Darker Side of Travel* (Sharpley and Stone 2009) を上梓し、理論及び実践におけるダークツーリズムの深化を進めた（井出 2024:240-1）。

2, 3 日本におけるダークツーリズムの広がり

ヨーロッパで生まれたダークツーリズムの概念の広がり、日本でも徐々に広まっていく。ヨーロッパのダークツーリズムは、ドイツのアウシュビッツ強制収容所への旅や、フランスのノルマンディー上陸作戦に関する資料館への旅など、戦争に関する場所への旅が多い。ただ、日本は災害大国であるため、災害による被災地を巡る旅という印象が日本のダークツーリズムには強い。例えば、1995年1月17日に兵庫県南部を襲った阪神淡路大震災に関する「人と防災未来センター」への訪問が挙げられる。

日本で初めてダークツーリズムの概念が紹介されたのは、2008年に発表されたフंक・カロリンの論文『「学ぶ観光」と地域における知識創造』（フंक 2008）の中であった。しかし、このときの影響は限定的な範囲であった。

ダークツーリズムが日の目を見るのは、2013年以降のことである。2011年3月11日に東日本大震災が東北地方を襲い、多くの死者を出し、福島第一原子力発電所のメルトダウンによる放射能の影響はいまだに大きい。その最中、東浩紀は『福島第一原発観光地化計画』を著した。これは、チェルノブイリ原発事故の復興にダークツーリズムが大きな役割を果たしたことをもとに、福島第一原発を「だれも見ることができ、見たいと思う場所にする」（東 2013:12）という観光地化を提唱しているものである。これには賛否両論あったが、一般人への影響力は強く、ダークツーリズムは流行語大賞にもノミネートされた。

その後、2016年に *DARK tourism JAPAN*（ダークツーリズム・ジャパン編集部編 2016）が発売され、足尾銅山、軍艦島、三池炭鉱などの産業遺産もダークサイドから見つめることができると示した。

2, 4 ダークツーリズムへの批判

一方、ダークツーリズムの課題として、一番の議論になるのが倫理的な課題である。悲しみに打ちひしがれ、喪に服した人たちの前で、それに関与しない人たちが、一緒に立っていてよいのだろうかという問題である（親泊 2012:146）。また、ダークツーリズムというものが「単にツーリストの覗き見的な要望に応えるためだけのものに貶質し」（Schaller 2007:515）ていることも指摘されている。また、ダークツーリズムの概念化あるいは理論化が十分になされているとはいいがたく、これまでの研究では提供者に注目し過ぎるあまり、参加者や観光客の体験を十分に扱っていないと批判されている（Jamal and Lelo 2011）。

2, 5 ダークツーリズムとその意義・価値の中心

ダークツーリズムの意義として、井出明は、「悲しみの記憶の断絶が、さらに多くの悲しみを招来する可能性がある以上、新たな悲劇を生まないためにも、その記憶を確かなものにするには非常に大きな意義を持つ」（井出 2018:31）としている。また、ダークツーリズムの価値として、「現場で悼みを捧げつつ、地域の悲しみを承継することにある」（井出 2015:49）としている。それに対してフंक・カロリンは、価値の中心を教育においている。

来訪する観光者に地域の自然、文化、歴史を説明し、解釈する「学ぶ観光」⁶のような形態を推進することで、地域内における知識を生み、伝える内容、方法、人材育成などにおいて新しい取り組みを創生させることが、長期的に知識創造を促進する仕組み、知識を獲得する仕組み、そして知識を保護する仕組みのきっかけとなりえる（フंक 2008:43）。

また、親泊素子も同様の指摘を行っている。

⁶ 「学ぶ観光」とは、「観光者が地域で学び、そこで提供される知識が資源となる観光」（齋藤 2022:100）のことである。

ダークツーリズムは記憶にとどめておくべき被害や災害等を風化させないために、それを教育的、道徳的な形に高めて人々に理解をさせる大事な役割をもったツーリズムでもある（親泊 2012:147）。

ただ、これらダークツーリズムの価値の中心の二つの議論を二項対立として捉えるのではなく、両者を相互に促進させていくようなダークツーリズムが重要なのであると筆者は考えている。その際には、「民際学」的視点や「集合的記憶論」、「協育としての観光」などの理論を参照し、事例も含めながらダークツーリズムの再考を試みたい。以下、「民際学」的な視点について説明を加えながら、観光の意義について照射していく。

3 民際学による民際的紐帯と観光

3. 1 民際学

「民際学」という造語を考案した中村尚司は、民際学に込められた思いとして次のように述べている。「近代の社会科学では、人びとは無視されてきた。その潮流に対抗して、次の時代には人びとが主体となって担う学問を築きたい、という願望を込めた用語である。同時に、現代世界において＜国際＞という言葉がもつ、強い魔力からの解放をめざす志もこめられている」（中村 1994:194）としたうえ、その意義として、

このような時代状況において、民衆みずからの社会的な営みにかたちを与え、他人を納得させる方法を見つければ、専門家以上の仕事をするであろう。民衆の側は、社会活動の当事者であるという事実によって、当事者でない専門家より深く、当の社会問題に気がつく、そういう有利な条件をもっているからである。民衆がこのように自己の課題を解決しようと学ぶのが民際学である（中村 1994:198）

としている。つまり、国境を超えた民衆や、普通に生きる普通の人びと（柳田的常民）が社会活動に対して専門家よりもより良い仕事をするとは解釈して良いだろう。

民際学は、専門を持たず、地域に生きている普通の人々が学問の対象となる学問であるとし、「民際学が最終的な課題とするのは、人間の社会的な関係のあり方である」（中村 1994:201）とする。また、「民際学の営みは、国家の学問を教えたり、経済援助をしたりするのではなく、その反対に、お互いに教えてもらったり、助けてもらったりするところから始まる」（中村 1994:203）という。

すなわち、国境を超えた交流により、民際的交流が促進され、自己の課題を解決していこうとする取り組みが生まれることが必要なのである。

また、鶴見和子は、「国際」と「民際」の差異について検討を加えている。

「国際」というのは、国と国との関係、あるいは政府対政府の関係をさします。ふつう外交関係とよばれるものです。（中略）「民際」というのは、国をこえた、民衆と民衆とのつきあいをさしています。制度化されていない場合、および個人と個人が国をこえてつきあう場合に、「民際関係」ということばを使って、政府間の関係と区別することができます。国をこえて草の根の市民が交流し、協力し、連帯することです（鶴見 1998:127-8）。

ただし、民際を考えるうえで大切なのはいかなる世界をまず目指すのかを明確にさせることだという。福沢諭吉の唱えた「脱亜入欧」⁷は、アジア（「亜」細亜）の中にある日本が近代化に乗り遅れているため、そこから「脱」し、西「欧」諸国に日本も追いつき、仲間「入」りを果たそう、という思想である。ここでは、「西欧文明の吸収能力をもつ人が国際人ないし民際人として最も好ましい人びとであつただろう」（鶴見 1998:128）という。しかし、現在は西洋諸国の文明の吸収能力だけでは足りなくなってきたという。

⁷ 前述した中村（1994）の帯には『脱欧入亜』のすすめ—もうひとつの豊かさを求めて、いまアジアへ！—と記されている。ここから、中村尚司と鶴見和子の民際学の捉え方の一致が見えてこないだろうか。

それぞれの社会は、それぞれの伝統と文化とをもち、人間として豊かに暮らしてゆくためには、それぞれの文化の伝統を生かし、それぞれの社会の民衆の生活上の基本的な必要を充つことが大切である。(中略) 西欧諸社会の文明および文化と、非西欧諸社会の文明および文化とを、対等に見なす立場 (鶴見 1998:128)

が必要だとしている。

加えて鶴見が指摘しているのが、「相互貢献能力」(鶴見 1998:129) の育成である。西欧文明の吸収力だけでなく、相互貢献能力の育成によって、前述の西欧諸社会と非西欧諸社会の文明と文化を対等に見なすことができるような社会を目指すことができるという。

民際人は、小さな民の立場から世界を見ることになります。それは、自国の政府の政策とは異なる価値観に向かって発言し、行動することを含みます。民際関係は、国際関係の足りない点を補ったり、あるいは民際関係によって、国際関係を変えさせてゆくことにもなるでしょう (鶴見 1998:129)。

3, 2 民際的紐帯と観光

民際学を発展させた「民際的紐帯」を提唱したのが、郭育仁である。郭は、「何か共通の課題を取り組んだり、偶然性の伴う非日常的な共同体験を持ったりすることによって形成された『紐帯』というものがある」といい、「この民際的紐帯の形成には、地域社会の住民の主体性が先にあり、来訪者と学び合う姿勢が求められる」(郭 2023:101) という。そして、民際的紐帯の形成を4つに分けている (図3)。

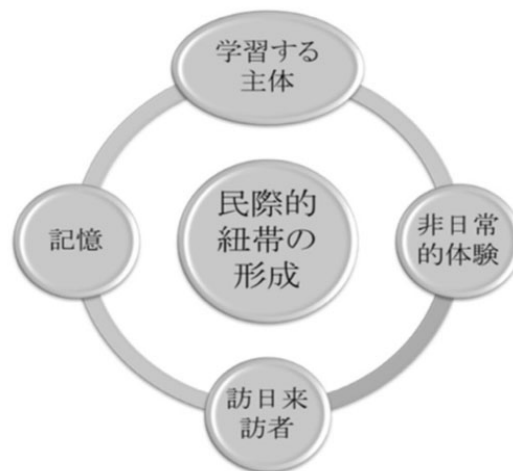


図3 民際的紐帯の形成
出典:郭 (2023:103)

地域に住まう学習する主体と訪日来訪者 (観光者や中長期滞在者も含む) が非日常的な体験や共同作業を経て、記憶というものによって結ばれ、関係性の継続、すなわち、ゆるやかな民際的紐帯が形成されていくと考えている。そして、このプロセスが回数を重ねることにより、民際的紐帯といったものが確められながら、お互いの文化を認識し、尊重して、場合には溶け込む努力がそれぞれの暮らしの中で実践されはじめると考えられる (郭 2023:102)。

前節の鶴見和子の民際人の指摘にあるような「文明吸収能力」と「相互貢献能力」の涵養が民際的紐帯では目指されていることがわかる。郭も、民際人としての能力—外来文化吸収能力と相互貢献能力—が高まっていけばいくほど、観光立国の新境地を切り開いてくれることに間違いはない (郭 2023:108) と指摘している。民際的な交流や記憶が、たとえ一時的なものであったとしても文化の

継承者としての観光者に変容していく可能性を秘めているのである。

そうしたときに重要になるのが、「集合的記憶」の概念である。そこで次に、ダークツーリズムと絡めて「集合的記憶」の議論を検討していく。

4 記憶の共有を喚起するダークツーリズム

4.1 集合的記憶

ここでは、このような苦しみの記憶が「ダークツーリズム」によって顕在化され、個人的記憶から集合的記憶に変容し、それが「共有」される重要性を論じる。

まず、集合的記憶論の研究の流れを整理しておきたい。

集合的記憶は、モーリス・アルヴァックスによって提起され、「記憶や思い出は個人的なものであるだけでなく、社会的・集合的な側面を持つ」（木村 2023:60）ものであるとされている。「彼の関心はただ、何が生きている人間を集団として一つにまとめているのか、という問いに向けられていた。その際に彼は、結末の最も重要な手段である共通の思い出の重要性に気づき、この洞察から『集団の記憶』なるものが存在することを導き出し」（Assmann 1999=2007:159）ている。それに対して、アスマンは、アルヴァックスの集合的記憶論に注目し、「コミュニケーション記憶」と「文化的記憶」の概念を提唱した。前者は、

日常における人々の（口頭による）コミュニケーションと相互行為によって自然発生的に生まれる。この記憶の内容は、個人がその人生の枠組みの中で同時代人と共有している、最近の過去についての思い出だ。この過去はおよそ八十年から百年、つまり三世代から四世代前まで遡る。個人の有機的な記憶を基盤とする「コミュニケーション記憶」は可変的であり、この記憶を体現している担い手が交代すれば、その内容もまた移ろう（Assmann 1999=2007:563）。

後者は、「メディアなどの外部装置に依存し構築された、長期的な記憶」（鈴木 2022:42）である。「文化的記憶」は以下の主要な点で特徴づけられる。

（一）特定の集団のアイデンティティを具体的に表していること。「文化的記憶」は、ある集団が自らの独自性と統一性の意識を依拠させることができる共通の知識を保持する。

（二）再構成されたものであること。「文化的記憶」によっていかなる過去のヴァージョンが提示されるかは、想起の共同体における現在の関心と必要によって左右される。

（三）メディアによって形づくられていること。これが「コミュニケーション記憶」と「文化的記憶」を区別する最初の弁別的な特徴だ。文字、イメージ、儀礼、記念碑、場所といった物質的なメディアによって客体化され、記号体系によってコード化されていなければ、共通の知識を固定し、保管し、伝承することができない。

（四）制度化されていること。「文化的記憶」の内容を世代の連鎖を貫いて維持するためには、伝承の経路を制度的に確保し、儀礼的反復やテキスト解釈といった実践によって繰り返し再活性化しなければならない。

（五）拘束力があること。「文化的記憶」は、何らかの価値のパースペクティブによって構造を与えられており（中心と周縁、カノン）、集団にとって規範的な意味を産出する。

（六）反省的であること。「文化的記憶」は、その担い手である集団の生活世界、集団の自己像、さらには自らを解釈する。以上のことを背景として、ヤン・アスマンは「文化的記憶」の概念を次のように定義している。文化的記憶という概念が要約しているのは、各々の社会、そして各々の時代に固有の、再利用されるテキスト、イメージ、儀礼の総体である。それらを『保つ』ことで、各々の時代の各々の社会は、自己の像を固定させて伝える。つまり、主として過去に関する（しかしそれだけではない）、集団によって共有された知識のことであり、その知識に依拠して集団は自らの統一と独自性を意識する（Assmann 1999=2007:563-4）

と文化的記憶を6つの点から整理している。

4. 2 ダークツーリズムと記憶の共有

ダークツーリズムと記憶についての論文としては、鈴木（2022）がある。鈴木は、負の記憶が個人に受容・共有されていく過程をダークツーリズムツアーの参与観察によって明らかにした。また、筈谷・阿部（2021）は、長島愛生園（岡山県瀬戸内市）の十坪住宅を事例に、「ダークツーリズムとも言える観光や訪問学習が展開され、『地域』を超えた継承活動が可能になった」（筈谷・阿部 2021:60）としている。つまり、ダークツーリズムによって個人的記憶から集合的記憶への変容が見られたといえる。

有末は、「集合的記憶は、個人の記憶だけでは成り立たない。まさに、集合的になって、そして、『社会の記憶』としていわば公認されていかないと、集合的記憶として記されることはない。集合的記憶の条件は、もちろん、時代状況や世代の経験として多くの人々に共有されるという『体験の共有性』であるが、『共有性』の中身は、集合的記憶の経験の仕方によって異なる」とし、「集合的記憶のレベルで社会的記憶として結晶された記憶は、非体験者にも伝わっていく」（有末 2016:33）と指摘している。

アルヴァックスも、感情を共有する必要性を論じ、「われわれの記憶が他人の記憶によって助けられるためには、他人がわれわれに証言を与えてくれるだけでは十分ではない。さらにわれわれの記憶が他人の記憶と一致しつづけていることが必要であり、また、われわれの記憶と他人の記憶の間に多くの接触点が十分存在し、それらが喚起させる思い出が共通の基礎の上に築かれること」

（Halbwachs 1950=1989:16）が必要であるとする。加えて、「過去の出来事的位置を、集合的記憶の枠組みのなかに再発見することを条件としてはじめて、過去を想起することができる」

（Halbwachs 1925=2018:364-5）としている。ダークツーリズムという「体験」が「共有」されることによって、個人的記憶から集合的記憶へ変容し、他人との記憶の間に接触点を存在させ、非体験者の社会的記憶として結晶し、継承されていくのである（図4）。

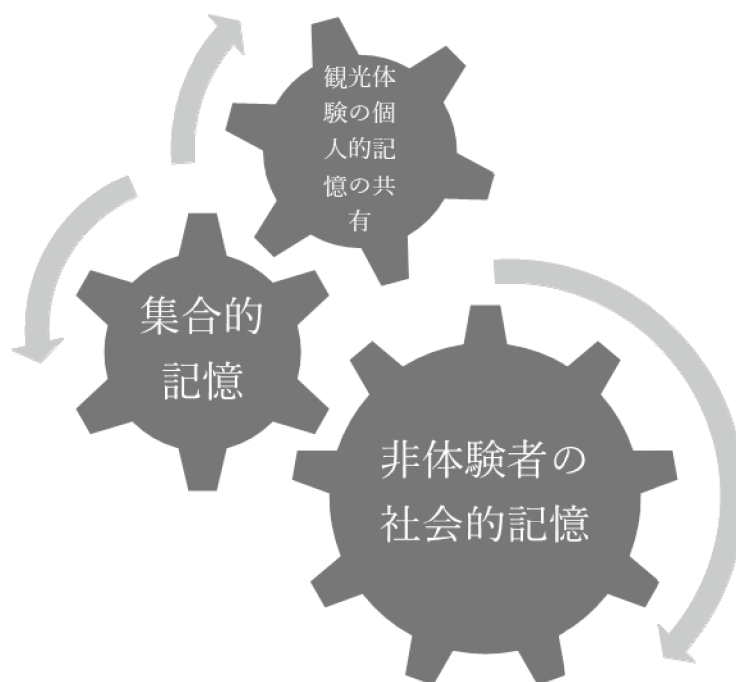


図4 観光体験の記憶継承の駆動
筆者作成

リア・ダングレーもまた、「ダークツーリズムそのものは、大衆的良心の発揮の一部をなすものであって、社会はそれを記憶し、それを踏まえて進むことが肝要である」（Dunkley 2017:109）としている。

4, 3 真の同感性を持つ協育としてのダークツーリズム

ここでは、「経験」を「共有」する重要性を持つダークツーリズムが「そこを訪れる観光客たちに対し（再教育を含む）教育的（reeducating）的効果をもたらすものであることが期待される」（大橋 2022:2）ことに着目し、井口のいう「共感、協育としての観光」との接続を図りたい。

リア・ダングレーによると、「ダークツーリズムサイトが、たとえば取り組み方を変えて、単なる共感性や自然発生的な同感性を超えるような、真の同感性、すなわちコンパッションを生み出すものとな」（Dunkley 2017:108）と指摘している。大橋は、「共感性」を「端的には印象」であり、「同感性」は「“単なる共感性”とは異なって、行動を起こすための起動力となるような感動的反応（emotional response）というものであり、行動を起こすにあたり本質的な（essential）引き金になるものである」（大橋 2022:3）としている。

次に、井口は、教育には、「協育」の視点が重要で、「地域とそこに住まう人々に対して『共感』することができるという感性の力の涵養が要求されるまちづくり教育・観光教育」（井口 2007:193）が必要であるとする。

「協育」とは、「教え手と教わり手の垣根を超えて、共に学び合うことで気付き合い成長していくことで、地域の文化発展につながるという行為」（井口 2008:226）とする井口の造語である。

ダングレーと井口の議論を統合すると、ダークツーリズムには、「真の同感性をもった協育」が必要であると言えるのだ。

「ダークツーリズム」と「真の同感性をもった協育」の接続が図られることにより、以下の「ウトロ」におけるダークツーリズムのような、差別された人々の悲しみや苦しみに、私たちが「寄り添い、大切にするための『ふるまい』を学ぶ」（遠藤 2018:175）こともできるだろう。

5 ウトロという土地

5, 1 ウトロ地区の歴史

ウトロ地区は、京都府宇治市に位置し、近鉄伊勢田駅から徒歩8分ほど、ウトロという地名の由来は、「伊勢田村字宇土口（うとくち）」が転じ、「口（くち）」が「ろ」と誤って読まれ、地名として定着した。戦前までは日本人地主が所有する畑、荒地であった。

1940年に着工された「京都飛行場」建設工事は政府通信省、京都府によって設計・施工され、滑走路整備や格納庫建設などの大規模な土木工事に、安価で強靱な労働力として朝鮮人労働者約1300人が半強制的に動員された。併設された日本国際航空工業株式会社の航空機製造工場では、輸送機や当時「赤トンボ」と呼ばれた練習機などが大量に製造された。1943年ごろ、その工場跡地の片隅に朝鮮人労働者を収容する飯場が作られた。これが現在のウトロ集落である。

1945年、日本の敗戦により軍事工事は中止されたが、取り残された朝鮮人労働者にはなんの補償もなかった。ウトロ地区は、戦後、朝鮮人にとっての避難場所、情報センターの役割を果たしていた。一方、戦時中の航空機製造工場は、GHQ（連合国軍総司令部）によって接收され、自動車工場（のちの日産車体株式会社京都工場）に生まれ変わり、一部は陸上自衛隊大久保駐屯地（図1）となった（斎藤 2010:37-8）。

5, 2 強制立ち退きとの闘い

1980年代、業績不振にあえぐ、日産自動車グループは経営赤字補填のため遊休資産の売却を検討し、ウトロ地区の土地を処分する方針を決めた（斎藤 2010:39）。この方針は一切住民の知るところにはならず、日産車体から売買目的で設立された不動産会社（有限会社西日本殖産）に転売された。ウトロ地区の立ち退き裁判は、過去の経緯や住民たちの居住実態を無視し、一切取り上げることはなかった。そのため、住民は「時効取得」を主張することしかできず、1970年に裁判所は住民たちにウトロ地区の明け渡しを命じた。

ウトロ地区を支える日本人支援者の運動は1986年の「ウトロ地区に水道敷設を要望する市民の会」から始まり、その後土地問題が発覚し、「地上げ反対！ウトロを守る会」が結成され、裁判支援、デモやパレードでウトロ問題を広める活動を行なった。この取り組みは世界でも発信され、故郷の韓国政府までも動かし、2007年末に30ウォン（当時の金額で3億6000万円）の支援金が韓国国会で可決された（金 2023:25-7）。裁判と運動という運動を経て、普段なら薄まっていくはずの「居住の記憶」が場所の存在、有無を語る証＝歴史として書き下ろされたのである（全 2011:99）。

5. 3 新たなまちづくりとウトロ平和祈念館

粘り強い住民と支援者たちの取り組みによって立ち退きの危機を乗り越え、ウトロの人々が訴えてきたまちづくりへの想いが現実のものとなっていく。過酷な歴史を連帯の力で乗り越えた多くの人々の関心を集めることになった。また、日本の市民や在日の青少年、学生もウトロを訪れ、歴史学習、人権学習の場として様々な取り組みが行われた。2018年1月からウトロ市営住宅第1棟（図2）への入居が始まり、平和祈念館事業が本格的に始まった（金 2023:27）。そして2022年4月にはついにウトロ平和祈念館（図3）が開館した。

同施設はウトロ地区の東側の土地に建てられ、本館と交流の広場（マダン）、外部展示場などで構成される。「野外で焼肉ができるようにしてほしい」という強い住民要望があり、朝鮮人飯場を移設したものや、昔の井戸端を再現し、ニンニク畑も作り、在日コリアン集住地区の生活感あふれた空間を再現する（斎藤 2022:118-9）。

ウトロ平和祈念館では毎月のように講演会、研究会、交流会、文化祭や音楽祭が開かれている（図4）。これには、国籍、人種、地域内外を問わず、もちろん観光客でも自由に参加が可能である。また、夏には子どもたちを対象にした「こどもカフェ」も開催されている。



図1 現在の陸上自衛隊大久保駐屯地
2024年10月26日筆者撮影



図2 ウトロ市営住宅
2024年10月26日筆者撮影



図3 ウトロ平和祈念館
2024年10月26日筆者撮影



図4 ウトロ文化祭の農楽隊の演奏
出典:週刊しんぶん京都民報（2023）

6 ウトロ平和祈念館来館者用感想ノートへの記述からの考察

ここでは、ウトロ平和祈念館来館者用感想ノートの記述から観光者がウトロに対して、何を感じ、経験しているのかを抽出し、記憶の共有、民際的紐帯、協育を通じた社会的実践であることを考えたい（括弧内と下線は筆者）。

6. 1 ポジティブな感情を見出す

大変なご苦勞をされた方々の悲しみ、怒りが伝わってくる反面地区の方々が文化を大切にしようとして努力されていることなど知ることができ良かったです。あたたかみのある、未来志向の展示で大変見ごたえがありました。これからは皆様お体を大切に守り伝えていってください。
(2022 年 6 月 3 日)

こういった展示を見た後は、たいいてい、自分に何ができるか、できたんじゃないかと自己嫌悪になることが多い中、今日は元気をもらえる瞬間がたくさんあり、本当によかったです。(2022 年 7 月 31 日)

在日 3 世の者です。展示やお話を伺えて良かったです。祖父母や父母から聞いていた話とも一致している部分もあり、あらためて勉強になりました。この場所が平和につながりますように心から祈っております。またこれからの心の励みにします。(2022 年 8 月 12 日)

差別やさまざまな苦難をのりこえそして今も戦われている皆様の笑顔に勇気を頂きました。人と人をつなげていくことの大事さを教えられました。(2023 年 2 月 10 日)

ちょうど 3 階の展示で農楽隊の女性のことをみてからの農楽隊の演奏をみて胸があつくなりました。フィールドワークも、2 階の展示も、1 階での参加者とのやりとりもとってもあたたかく楽しく、元気がもらえました。(2023 年 4 月 30 日)

副館長さんのお話を聞いたり、展示を見ると人の温かさを感じました。実際フィールドワークへ行ってみると、音も少なく静かな所でいい所だなと思いました。でも、それも、いい所にしようとして奮闘した人達がいてのことであると感じました。心が温かい気持ちになりました。(2023 年 9 月 9 日)

本日研修に来させていただき本当によかった。城陽市で育った私にとってこの地は身近なところであった。うわさ話ばかりで知らないことがたくさん。この年になるまではずかしいことである。力強さとあたたかさを体いっぱいに感じることができました。ありがとうございました。元気をいただきました。(2023 年 10 月 30 日)

まず、これらの記述からわかることは、展示や、現地の人から自身の心に対して「あたたかさ」、「希望」や「元気」といったポジティブな感情を見出していることである。ウトロで必死に生きてきた人々の想いやつながりに共感を示していることが読み取ることができる。

親泊素子も Domsday tourism⁸の事例の中で、

負の遺産と言われる場所を訪ねることの意義は、これが訪れた人にポジティブな経験となることかどうかということである。この事件が起こった事実を正しく理解し、この歴史や自分のまわりの環境についてより理解を深められるかどうかという点にダークツーリズムの存在価値はある（親泊 2012:141）

⁸ Domsday は、「最後の審判の日」とか「世界の終わりの日」と訳され、Domsday tourism はもうすぐなくなってしまう観光地を訪ねる観光のことである。例として、北極の氷が溶けてしまうということで北極を旅したり、ベニスの町が水に沈んでしまうということでベニスに行くというような旅をさす（親泊 2012:141）。

と指摘している。

6, 2 自己をみつめ直す

ここに来て飯場の再現や実際の写真などを見て、壮絶な歴史があったことを知ることができました。

高校時代の友人にも少なからず朝鮮ルーツの子がいましたので、差別とかそういう意識もなく、普通に接していましたが、もしかしたら、その友人も内心複雑な思いをもっていたのではないかと思います。これから先、ウトロが先頭にたって「共生社会」の先進地域となれるように願っています。(2022年6月13日)

父親が出稼ぎで日本に来たとたんに横浜港で拉致され、水力発電現場で働かされたそうです。父の歴史と自分史を思い起こすため、このウトロに行きたいと言っていますが、体調が悪く、連れてくるのが困難ですが、元気になったら来ます。(2022年7月17日)

家族に教えてもらって初めて来ました。2Fのせんたくものをたたき棒や、タイル張りのカマド、チェサの時の食器が祖母の家と同じで小さい頃のことを思い出していました。チェサの展示の、“子どもにとってはごちそうの日、女にとっては重労働の日”の説明書きに、“そやったな〜”としみじみです。チェサの度に学校休んで、知らない先生や同級生から“多すぎやろ。ズル休みや”と言われて困ったのを思い出しました。(2023年3月10日)

1949年生まれの私が子どもの頃「チョーセンジン」と呼んで、日本人が差別していました。子ども心に何だかおかしいと思っていました。大人になってから「在日」の方には納税義務だけあって選挙権も被選挙権もないなどの差別があると知りました。・・・ここを訪問することで、子どもの頃の差別に少しでも謝罪になればと思っています。(2023年4月10日)

自分が、これから日本社会で生きていく中で、日本で生まれ、日本で教育を受けたマジョリティーとして、これから、日本で生活をしていく、日本の社会で生きて行く人達に対して自分が受けてきたような対応をしないためにも歴史を学ぶ必要があると考えています。自分のルーツも、名前も、アイデンティティも私自身であり、守っていききたいと思うと同時に、他者の価値観を大切にできる自分でありたいです。(2024年3月23日)

これらの記述からわかるのは、展示物を見て、「自分史」を回想していることである。現地を訪れることによって改めて自分や親族の過去を想起し、ある意味での「回想法」を行っていると言える。

6, 3 現地で感じ、気づき、行動する

“ウトロ”を直接訪れてみたいという思いが本日ようやく実を結びました。メディアを通して得たものと、直に目で見て得たものとの印象はまるで違いました。後者は人々が暮らしたという“ニオイ”がありました。人が手と手をつなぎ、泣き笑って日々を紡いでいく・・・そんな豊かな日々が感じられました。(2023年6月16日)

くしくも、放火事件をおこした人物が語っていたように、個々の意識の問題ではなく、この国の政府が起こした、侵略戦争と植民地支配それをいまだ反省せず、ひらきなおっている姿とそれがこの国に形成してきたゆがんだ構造の問題だということをしっかりとらえて、今後も行動したい。同時に、戦うことの大切さ、館内のスタッフの皆さんを含めたウトロの皆さんのやさしさ、つながろうとする努力にとっても学ばされ、希望を感じた。(2023年8月13日)

或る本の中で、日本の歴史教育は「誰が誰に勝った」、「誰がどんな制度を作った」という統治

者目線の話ばかりで、争いの中にどんなせめぎ合いがあったとか、どんな人々が不条理を強いられたとか、制度が人々の暮らしや価値観をどう変えたかといった、庶民目線の話を取ってこなかった、という趣旨のことが書かれていました。この社会の差別を考えるためにも、この庶民目線とでも言うべき視点は重要だと思います。国と国、政府と政府、民族と民族の歴史をきちんと学ぶことはもちろん大前提ですが、そこには血の通った生身の人々が呼吸していて、固有の信念や倫理観を持ち、それぞれに大切なものを守ろうと、時には取り戻そう、記憶し続けようとしながら精一杯、奮闘していたと言うこと、家族や友人、地域の仲間たちと支え合いながら、かけがえのない日々を過ごしていたこと、そういったことに「気付く」ことが欠かせません。（2024年3月17日）

ここでは、教科書の中での学びだけでは不十分であり、自ら現地に赴き、「ニオイ」を感じ、現地で生きてきた人びとの思いに「気付く」ことが重要なのである。

7 考察

ウトロの人々が行ってきた活動に対して支援を行なった日本人という「民際関係」の構築の歴史を学び取り、それらをダークツーリズムによってポジティブな経験として観光者が受容し、共有し、記憶というものによって結ばれ、「民際的紐帯」が形成されていく。その体験の記憶は、他人へと共有され個人的記憶から集合的記憶へと変容し、社会的記憶として結晶し、継承されていく。その流れの中でその記憶に共感し、新たな気付きが生まれ、自分ごととして捉えていくという「記憶の共有」がみられた。また、展示や館長から学びを得、焼肉交流会、子どもカフェなどの交流を通じて大人も子どもとともにウトロについて学びあう「協育」もみられた。ダークツーリズムが「悲しみを知る場」ととどまらず、希望・連帯・行動への動機づけを生み出す場になりうるのである。

ウトロ平和祈念館で観光者は、現地に赴いて、日本が犯してきた非人道的な差別の実態を学びつつ、在日コリアンたちの紐帯の強さや思いに共感し、気付き、自分ごととして「自分史」を回想し、そこでの経験を持ち帰っていると考察できる。

8 おわりに

本論文の課題としては、ダークツーリズム論、集合的記憶論、民際学、民際的紐帯、協育と理論を横断的に用いているが、理論間の関係性が概念的な部分でしか用いられていない。また、使用したデータが、来館者用感想ノートに限定され、自発的に書いた人や、ポジティブな感情をもった来訪者に焦点が合わさりやすく、何も感じなかった来訪者や違和感や拒否感を抱いた来訪者の感情が見落とされている。さらに、ウトロ平和祈念館が、強い当事者性や長年の支援運動、住民と来訪者の距離の近さというかなり条件の整った環境であり、他のダークツーリズムにも同様のことが言及できるのかについては疑問が残る。これらは比較研究、運営側への聞き取りを通して深化させることが可能であるため、今後検討していきたい。

【参考文献】

- 有末賢（2016）「集合的記憶と個人的記憶—記憶の共有性と忘却性をめぐって」『法學研究』89(2)、19-40。
- 東浩紀（2013）「福島第一原発観光地化計画とは」東浩紀編『福島第一原発観光地化計画』12-21、ゲンロン。
- ダークツーリズム・ジャパン編集部編（2016）『DARK tourism JAPAN—産業遺産の光と影』東邦出版。
- 遠藤英樹（2018）「パフォーマティブなダークツーリズムの可能性—『パフォーマティヴィティ』概念に関する批判的な検討を通じて」須藤廣・遠藤英樹『観光社会学 2.0—拡がりゆくツーリズム研究』第5章、福村出版。
- 遠藤英樹（2019）「他者に寄り添い共生するゲームとしての『ダークツーリズム』—『ダークツーリズム』から『ポリフォニック・ツーリズム』へ—」『立命館大学人文科学研究紀要』121、5-32。
- 全ウンフィ（2011）「マイノリティの居住空間から集合的な記憶の場所へ—在日コリアンコミュニティ・ウトロ地区を事例として」『コリアンコミュニティ研究』2、97-103。
- フंक・カロリン（2008）『「学ぶ観光」と地域における知識創造』『地理科学』63(3)、160-173。
- 橋本和也（2011）「観光における文化の商品化」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟（編）『よくわかる観光社会学』68-9、ミネルヴァ書房。

- 筈谷友紀子・阿部大輔（2021）「空間の残存と悲劇の記憶の継承メカニズムの関係性に関する考察」『日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集』19、57-60。
- 井出明（2015）「ダークツーリズムの真価と復興過程—“復興”のさらに先にあるもの」『復興』13(7)、49-56。
- 井出明（2018）『ダークツーリズム—悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎新書。
- 井出明（2024）「ダークツーリズム」竹内正人・竹内利江・山田浩之編『入門 観光学[改訂版]』第16章、ミネルヴァ書房。
- 井口貢（2007）「地域で協育し、地域を協育する観光文化—観光立国実現のために何が必要か—」井口貢（編）『まちづくりと共感、協育としての観光—地域に学ぶ文化政策』第6章、水曜社。
- 井口貢（2008）『^{しめ}国の光を観す』ということ』井口貢（編）『観光学への扉』終章、学芸出版社。
- 井口貢（2021）『深掘り観光のススめ—読書と旅のはざまで—』ナカニシヤ出版。
- 岩崎早穂（2024）「小学校における観光教育」井口貢監修・郭育仁（編）『これでよいのか観光政策—22世紀に生きる子どもたちのために』第10章、ビジネス実用社。
- 郭育仁（2023）「民際的紐帯の形成とその訪日観光振興」『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編』6、99-112。
- 金秀煥（2023）「ウトロ地区の歴史とウトロ平和祈念館」『人権と部落問題』968、22-28。
- 木村至聖（2023）「記憶—産業観光とノスタルジー」神田孝治・遠藤英樹・高岡文章・鈴木涼太郎・松本健太郎（編）『移動時代のツーリズム—動きゆく観光学』60-67、ナカニシヤ出版。
- 古賀広志（2022）「ダークツーリズムの現代的意義—観光行為の社会物質的展開」『エキシビションとツーリズムの転回』176、245-292。
- 中井治郎（2019）『パンクする京都—オーバーツーリズムと戦う観光都市』星海社新書。
- 中村尚司（1994）『人びとのアジア—民際学の視座から—』岩波新書。
- 岡本伸之（2001）「観光と観光学」岡本伸之編『観光学入門—ポスト・マス・ツーリズムの観光学』第1章、有斐閣。
- 大橋昭一（2022）『「ツーリズムを通して平和を」のスローガンによせて—ダークツーリズムはその進展にどのように役立つものか—』『経済理論』411、1-19。
- 親泊素子（2012）「Dark Tourism 試論『負の遺産は観光資源になり得るか?』」『江戸川大学紀要』22、139-148。
- 齋藤千恵（2022）「震災遺構に関わる集合的記憶の形成—大川小学校事件を巡る異なる記憶—」『観光研究』34、99-108。
- 斎藤正樹（2010）「ウトロ：強制立退きから新しいまちづくりへ」『コリアンコミュニティ研究』1、37-44。
- 斎藤正樹（2022）『ウトロ・強制立ち退きとの闘い』東信堂。
- 須永和博（2014）「エコツーリズム」大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治（編）『観光学ガイドブック—新しい知的領野への旅立ち』176-179、ナカニシヤ出版。
- 鈴木里奈（2022）「記憶の継承過程における個人的記憶の想起と接続—ダークツーリズムの語りを事例として」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』35、39-54。
- 鶴見和子（1998）『鶴見和子曼荼羅VI 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』藤原書店。
- 安村克己（2006）『観光まちづくりの力学—観光と地域の社会学的研究』学文社。
- 安村克己（2011）「観光研究の土台からみる現代観光の変遷」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟（編）『よくわかる観光社会学』18-19、ミネルヴァ書房。
- Assmann, A. (1999) *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des Kulturellen Gedächtnisses, dritte auflage*, Munchen. (=2007、安川晴基訳『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』水声社。)
- Dunkley, R. (2017) A light in dark place? Analysing the impact of dark tourism experiences on everyday life. In G. Hooper and J. Lennon (eds.) *Dark tourism: Practice and interpretation*, 108-10, New Directions in Tourism Analysis.
- Foley, M., and Lennon, J. (1996) JFK and dark tourism: A fascination with assassination. *International Journal of Heritage Studies*, 2(4), 198-211.
- Halbwachs, M. (1925) *Les Cadres sociaux de la memoire*, Paris: Albin Michel. (=2018、鈴木智之訳『記憶の社会的枠組み』青弓社。)
- Halbwachs, M. (1950) *La memoire collective*, Paris: Albin Michel. (=1989、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社。)
- Jamal, T., and Lelo, L. (2011) Exploring the conceptual and Analytical Framing of Dark Tourism: from

Darkness to Intentionality. In R. Sharpley and P.R. Stone (eds.) *Tourist Experience: Contemporary Perspectives*, 29-42, London and New York: Routledge.

Lennon, J., and Foley, M. (2000) *Dark tourism: the attraction of death and disaster*, Continuum.

Sharpley, R. (2009) *Shedding Light on Dark Tourism: An Introduction*, In R. Sharpley and P.R. Stone (eds.) *The Darker Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, 3-22, Channel View Publications.

Sharpley, R., and Stone, P.R. (2009) *The Darker Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, Bristol: Channel View Publications.

Schaller, D.J. (2007) From the Editors: genocide tourism—educational value or voyeurism? *Journal of Genocide Research*, 9(4), 513-515.

Stone, P.R. (2006) A dark tourism spectrum: Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions. *Tourism*, 54(2), 145-160.

【参照 HP】

観光庁 (2024) 「訪日外国人旅行者数・出国日本人数」観光庁ホームページ (2024 年 10 月 30 日閲覧、https://www.mlit.go.jp/kankocho/tokei_hakusyo/shutsunyukokushasu.html)。

株式会社 JTB 総合研究所 (2020) 「オーバーツーリズム」株式会社 JTB 総合研究所ホームページ (2024 年 10 月 27 日閲覧、<https://www.tourism.jp/tourism-database/glossary/over-tourism/>)。

週刊しんぶん京都民報 (2023) 「宇治市・ウトロ平和祈念館 開館 1 周年『交流の場、役割大きい』来場者延べ 1 万 3000 人」京都民報 web (2024 年 12 月 14 日閲覧、<https://www.kyoto-minpo.net/archives/2023/05/13/post-29342.php>)。